

臨終の言葉

先人は、自身の人生最期の時をどのように迎えたのか……。
伝えられている多くの言葉からは、さまざまな生き様が見えてくる。
終わりよければすべてよし！と言われる。

人間は死に面する最期のとき、本当のことを語るというのが……。
先人の臨終の言葉を集めてみた。

- エノケン 喜劇俳優。本名榎本健一。昭和44年12月全身に黄疸症状が現われ、翌年の元旦に入院。病名は肝硬変であった。3日に「ドラが鳴るんだよ。船が来たよ、ほらほら」といい、妻のよしえが驚き「お父さん、船なんか一人で乗っちゃだめですよ」というと「うるせいや、早く乗れ」と答えたという。5日、よしえが「病院を出たら温泉にでも行きましょうか」というと「ありがとう」といった。これが最後の言葉である。66歳。
- 徳川夢声 話術家。昭和46年7月22日、腎盂炎で入院。7月末、彼は妻に爪を切ってもらおうと、その手を目の先にもって行ってじっと眺めた。妻は病人が自分の手を見詰めるようになると、まもなく死ぬという話を思い出して「疲れますよ」といってその手を下ろした。3日後の8月1日午後零時20分、妻に「おい、いい夫婦だったなあ」といって死亡。77歳。
- 梅原竜三郎 洋画家。昭和60年12月25日、風邪でたんを詰まらせ呼吸困難に陥り、入院。入院前に医者「アトリエに、描きかけの絵がある。見てきたまえ」といった。もちろんそんなものはないのである。翌年1月14日から昏睡状態に陥り、肺炎を起こし、15日、「胸が痛みますか」という医者の問に「心配ない、心配ない」と答えたのが最後の言葉となった。98歳。
- 二宮尊徳 江戸後期の農政家。通称金次郎。安政3年10月20日、今市の居宅で多くの崇拜者に囲まれ、「葬るに分を越ゆるなかれ、墓や碑を立てるなかれ、ただ土を盛り、そのわきに松か杉一本を植えれば足る」といって息を引き取った、69歳。（二宮尊徳）
- 山岡鉄舟 幕末の剣客。江戸城無血開城に貢献。明治20年左脇腹にしこりができ、胃ガンと診断された。翌年7月18日、医者「胃穿孔のため急性腹膜炎を起こしていることが判明。19日の払暁に「腹痛や苦しきなかに明けがらす」と辞世の句を詠む。そして手にうちわを握り、座禅を組んだまま大往生をとげた。52歳。
- 勝海舟 幕末・維新期に幕臣として、また新政府高官として活躍。明治32年1月19日午後5時頃、風呂から上がると坐り込んで「胸が苦しいからブランデーをもって来い」と家人に命じる。それをグラスに入れ「今度はどうもいけないかもしれんぞ」といって一口飲んだとたん、倒れて意識を失った。脳溢血であった。彼が息をひきとったのは2日後の午後5時。最後の言葉は「コレデオシマイ」である。76歳。